

## 般若波羅蜜多心經の一考察

岡本 糸美・木下 富夫\*

岡山理科大学理学部応用数学科

\*岡山理科大学非常勤講師

(2005年7月26日受付、2005年11月7日受理)

表題の経は、わが国には下記の七種類ある。

羅仟三蔵訳 摩訶般若波羅蜜大明呪経①

玄奘訳 般若波羅蜜多心経②

法月重訳 普遍智蔵般若波羅蜜多心経③

般若 共利言等訳 般若波羅蜜多心経④

智恵輪訳 般若波羅蜜多心経⑤

法成訳 般若波羅蜜多心経⑥

施護訳 仏説聖仏母般若波羅蜜多心経⑦

いまわが国において一般に使われているものは、玄奘訳の般若波羅蜜多心経であるから、玄奘訳を用いる。この経を略して心経ということにする。

ところで、この経の解釈は一般的なものが多いであり、学問的な解釈といえば、サンスクリットの解釈やチベット訳を云々したものであるが、ここでは玄奘の漢訳をもちいる。弘法大師空海はこの経の解釈として、般若心経秘鍵（今後略して秘鍵という）を著作されている。それによれば、

大般若波羅蜜多心経者即是大般若菩薩大心真言三摩地法門

とある。よって空海によれば、この心経は般若菩薩の悟りの世界を示す意味深い言葉を述べたものとなる。大正大学の福田亮成文学博士はその著「般若心経秘鍵」で“その語彙の詮索や論理、理屈や、乏しい人生経験の範疇のみで解しようと試みても、それはただ般若心経の一部分のみを自分のものとするのみであろう”と述べている。まさにそのとおりであり、語彙の詮索に陥らないように心して心経を考察したい。筆者は密教学を学ばず、仏教学（顕教）を専攻した故に、秘鍵に盛られている内容を気にとめながら、仏教学の立場で心経の内容に体当たりしたい。

摩訶般若波羅蜜多心経

大正蔵経によると、玄奘訳では摩訶の語はないが一般には用いているので摩訶を付加しておく。これは大いなるという意味であり、般若波羅蜜多は悟りにいたるべき智恵であり、そのための肝心の教典である。智恵とは智であって知ではない。知は対象のあるものを知る働きであり、智のほうは仏・真如・空にいたる働きと考えられる。

観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄

観自在菩薩は観世音菩薩のことで、般若波羅蜜多は真如を体得すべき智のことであり、行深とは禪定にはいることを意味する。深いと言っても深淺を意味するのではなく、分別を捨ててという意味に解すべきである。空海は秘鍵において

無辺生死何能断唯有禪那正思惟

という。この禪那正思惟こそ行深のこととするのがよいであろう。そのとき五蘊（物質と受・想・行・識の五つの精神的なファクター）は全て空と照見した。全てが空なればこそ一切の苦厄は無くなる（度する）のである。ここで、空について考察しておきたい。物は縁起によるから空だという。縁起によって生じるも

のは自性をもたない。たとえば、土が熱という縁に触れて茶碗になるというのは、土に自性がないからだとする。茶碗も自性がないから、土から生じうる。自性とは土が土としての性質を保ち得るものである。土も茶碗も無自性であり、空だという。また龍樹はその著＝中論＝において、薪と火の関係を例えとしている。薪がなければ火はない。また燃えてこそ薪であるから火が無ければ薪とはいえない。したがって火も薪も独自で存在できない。独自で存在できないものは無である。火と薪のような関係を因待といている。田中順照文学博士はその著「仏教における空と識」で“因待は無限の循環となり不可得である。因待が不可得であるということは関係づける我々の思惟が虚妄であることを示している”という。

舍利子 色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行識 亦復如是

ここでは、空を五蘊皆空の空とは違って真如を指している。弟子舍利子にたいして、色は空に異ならずと教える。色と空とが両方あってイコールで結んでいるのではない。色のままで空（真如・仏教では真理といわず真如という）だというのである。続いて空は色に異ならずとは、色は空に異ならずと同じ意味をくり返しているのではない。一般の者は色は空に異ならないといえ、それならば空は何かと思惟する。色から空へ空から何へと考えを展開しようとする。この夢遊病的思惟を破るために、空は色に異ならずといれたと思う。またもう一つの意味が考えられる。それは色よりも空の方が上、もしくは深いとの考えをもつ者がいれば、空は色に異ならずと入れたことで、色と空との関係は上下の関係でもなく意味の深さの関係でもないことが理解されよう。ここで色のままで空というよりも、空なればこそ色でありうるというべきかとも思われる。このように、色も空も別のものではないとしたが、さりとて色不異空 空不異色という場合には、色と空と二つあって色と空は同じと言っている感じがどうしても残る。その残感をなくするために次の色即是空 空即是色がある。これは色かと思えばそのまま空だというのである。空もまた然り。ついで受は身体と心で受ける感じのことであり、暑い寒い心地よいなどのように、感受すること。想は猫を可愛いと思ったり、花をみて美しいとか恋心をくすぐるとかいう想いである。行は行動であるがこの行いには、赤い花は赤く白ではないと限定する働きをとまなっている。またまた是の如しは、受想行識も「色不異空～空即是色」と同じく「空」であるといっている。このところ即ち“色不異空～亦復如是”を空海は秘鍵において普賢菩薩の三摩地という。その三摩地を空海は頌にして

色空本不二 事理元来同 無礙融三種 金水喻其宗

と示す。これは心経の色と空との関係は二つあるのではない。事（もの＝色）と理（真理＝空）はもとより同じである。華嚴思想の‘事と理が無礙であること’‘理と理が無礙であること’‘事と事が無礙であること’の三種は無礙であり融通しているという。心経のいう色と空との関係は、金（真理）で作った獅子（もの）の金と獅子の関係であり、水（真理）と波（もの）との関係であると言っている。即ち獅子を見て獅子かと思えばそれは獅子ではなくて金である。金かと思えば獅子である。また波をみて波かと思えばそれは波ではなくて水であり、水かと思えば波である。このような関係を心経は‘色即是空 空即是色’というのである。金かと思えば獅子であると言う場合には、時間の経過の全くない関係である。水波の関係もまた然り。

舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不増不減

は舍利子にたいして、ものは全て空だといったがその空の実相とは、ものは自然によって作られるものではなく、無くなるものでもない。生や滅だととられるものではない。人の眼識によって、知り得るものではなく、思惟を離れた空なればこそ諸法の実相は不生不滅と心証される。そして空の実相は垢と浄との二つをもって、清浄だ、やれ穢いというのではない。垢と浄の二つがあつて、どちらも区別がつかないといっているのではない。上述の色即是空・空即是色の如きものである。不増不減も相対的増減と受けとめてはならぬ。無限だから増えることをしらない。減ることも知らない。よって不増不減は無限を意味する。しかし、経のなかで無限と書けば、人は思惟によって何万光年なら無限かと限定する。それをさけるために、無限という語を使用せずに不増不減という言葉を使ったと考えられる。人間の知性はものをこのくらいかと、限定する働きをもっている。したがって知性を捨てない限り、無限にはなりえない。これを無限が理解できない

とか、理解できると言えば、無限と、無限を理解するものとの二つが生じる。不増不減とはあるものは、全て無限であるということである。經の不増不減はそういう無限をあらわしている。

是故空中 無色無受想行識 無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法 無眼界乃至無意識界

上の不生不滅不垢不淨不増不減において、全ては空なることを述べているが、それなればこそ、空の中には色(もの)はもちろん受想行識も無い。色は空なれば勿論空の中に色はありえない。受想行識も同じである。眼識・聴覚・匂いを知る識・味覚・触覚これらをまとめた心も無であるという。これはあらゆるものを否定しなければ、知性をもってそれらに執着するからである。眼に対して色、耳に対して声、舌には味、身には触、意は心としたが心に刺激をあたえるものとして、もの(ここでは法は仏法の法ではなく事物をさす)をあてる。これらは全て空である。無眼界の界は、新仏教辞典(中村元監修・誠信書房)によれば、層・要素などの意とあるから、集団とか世界とうけとめよう。すると眼に写る世界もなく、意識に映る世界もない。ここでも全てが否定される。前に舍利子にたいし空の相を抽象的に説き、ここでは色受～眼耳～声香等具体的なものをあげて否定している。

無無明 亦無無明尽 乃至無老死 亦無老死尽

無明(迷い)なければ、また無明の尽きることも無しとはどのようなことか。人も森羅万象もすべて仏または真如の現成したものである。したがって存在するものは明であって無明はない。しかし、明は自由自在であるから、明そのものが無明として歩きだす。明も無明も区別する必要はない。在るものは明または無明であって尽きることはない。なれどその無明も明の外にあるのではない。華嚴思想によれば闇(無明)は光(真如)の薄らぐところに生じる。しかし、その闇は光に包まれた闇である。尽きることもない無明も仏の相(内面のすがた)ではないかと解される。ここまでは抽象的なもの(法)を題材としているが、ここからは具体的な老死をもって説いている。老いることも死ぬこともなし。また老死の無くなることも無い。生きることも死ぬことも仏の表現なれば、老死無しといっても、老死の尽きることもなしといっても、そのまま、そのままよしと肯定される。老も死も先に述べた金獅子の喩のようなものである。老死は無いといいながら、老死の尽きることもないとは、西田幾多郎文学博士の「絶対矛盾の自己同一」のような立場としてよからう。

無苦集滅道 無智亦無得 以無所得故

苦集滅道は四諦とよばれている。新仏教辞典(中村元監修・誠信書房)によると「苦諦はこの世は苦であるという真理、集諦は苦の原因は世の無常と人間の執着にあるということ、滅諦は無常の世を超え執着をたつことが苦滅のさとりの世界であるということ、道諦とは滅諦にいたるためには八正道の正しい修行方法によるべきだということの意味する」とある。これは釈迦が初めて説法されたときの教えと言われるが、その苦集滅道も無だという。上の文において、無明なく無明の尽きることも無しと言ったようにあらゆる執着を絶とうとする。苦集滅道は成道を思惟する方法として説かれたのと思うが、これにも捉われてはならぬとのことであろう。智もなく、得るべきものもないから、執着するものは何もないというのである。このことは得るところ無きを以っての故にと、理由付けをしている。執着を捨てることが如何に大切かを述べたのであろう。

菩提薩垂 依般若波羅蜜多故 心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖 遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃

菩提薩垂は道を求める者であり般若波羅蜜多(空・真如に至る知恵)に依るが故に、心に罣りになるものがなく、無罣礙なる故に恐怖心も有ることなし、一切の罣りも夢想もなく、涅槃(悟りの境地)を極めることができる。ここで心に罣礙無ければとあるが、唯識によれば一切のものは、心より生じたものという。このことは、植物学者の心(識)から花びら何枚の白い花が生じ、芸術家の心(識)から恋心をくすぐるような白い花が生じるという。同じ白い花があつて、それを植物学者と芸術家が別々の見方をしているのではな

い。それぞれの識から、花びら何枚の花を、恋心云々の花を生じている。その心に罣礙なければ般若波羅蜜多の知恵によつて何ものにもとらわれることなく涅槃に至る。

三世諸仏 依般若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐三菩提

過去・現在・未来のもろもろの仏達も、般若波羅蜜多の知恵に依るから阿耨多羅（この上なき）三藐（真実）の三菩提（悟り）を得ることができる。もし少しでも有にたいする分別・執着があれば不可能である。前の文は菩薩が涅槃に達したのであるが、ここでは諸仏となっている。仏とは悟りを開いた最高位の方々である。その仏達が般若波羅蜜多（空の知恵）によって、阿耨多羅三藐三菩提すなわち悟りに至るとはどのようなことか。悟りを開いても即今に迷うから、常に般若波羅蜜多によらねばならぬと考えるか、あるいは前に述べたように、淨穢の二つを不二と考えたように、迷いも悟りも二つ無しと考えるかの何れかである。筆者は後者を取る。大乘仏教では淨と穢の区別がない。悟りと迷いの区別がないのが大乘の考えと思う。仏と衆生の区別がない。したがって最高位の仏も常に阿耨多羅三藐三菩提を得ようとする。西田幾多郎の「絶対矛盾の自己同一」に相当すると考えてもよいだろう。筆者はたびたび述べるが、悟りと迷いの関係も金獅子のような関係と思考するからである。

故知般若波羅蜜多 是大神呪 是大明呪 是無上呪 是無等等呪 能除一切苦 真実不虛

故に般若波羅蜜多は、是れ大神呪（神の言葉は不思議）なり、大明呪（明るきは悟り）であり、これより偉大なものはなく、したがって無等等（比較するもの無い）の呪（詞）であると知るべし。この呪を唱えれば一切の苦しみを除くことができる。これは真実だ。般若波羅蜜多の知恵は空そのものであり、現象界は空の現成したものだからかく言われる。空（真如＝真理）は現象のものとなって現れ、現象は空と円融する。真如は緑の柳として現れる以外に現れようがない。真如は紅の花として現れるより他に現われようがない。有名な言葉に「柳は緑、花は紅」というのがある。神呪明呪を唱えれば一切の苦しみは除かれる。この呪は真実にして虚ではない。その真実なることを識るものは、別にあるのではなく、空そのものが識るのである。したがって一切の苦しきもない。ここまでくれば、苦もそのまま般若波羅蜜多の相である。

故説般若波羅蜜多呪 即説呪日 羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶

故に、般若波羅蜜多の呪を説こう。その呪は次の如くである。

gate gate paragate parasamgate bodhi svaha

呪は真言である。真言は mantra といわれ、密教では陀羅尼という。空海の著「秘鍵」によれば

真言不思議 觀誦無明除 一字含千理 即身証法如 行行至円寂 去去入原初 三界如客舍

一心是本居

とある。これは真言は不思議であり、唱えれば無明を除くという。一字に多くの真理を含み、この身に真如を証する。行き行きて完全な寂照の世界に入れる。去り行って仏の源に帰ることができる。この世は仮の住みかである。我が心こそ本来の真実の居り場所であるという。されば、真理を自分以外の所に求めることはない。人の心も身も仏・真如の現れたものではないか。ただ、不思議なる真言を唱えよということであろう。また秘鍵には

陀羅尼是如来秘密語 所以古三蔵諸疏家皆閉口絶筆

陀羅尼（真言）は仏の秘密の言葉なれば、古来より三蔵を初とする多くの訳者達は皆口を閉ざしてきたとある。空海がこれを破って解釈しているが、筆者は密教の立場でなく、一般仏教の立場なので中国の三蔵法

師等にならって陀羅尼の解釈はあえて慎むことにした。

**参考文献**

- ① 大正蔵經 昭和8年刊 no 250 大正新修大蔵經刊行会
- ② 同上 no 251
- ③ 同上 no 252
- ④ 同上 no 253
- ⑤ 同上 no 254
- ⑥ 同上 no 255
- ⑦ 同上 no 257

- 参考書**
- 阿部竜樹著 2004刊 空海の般若心経 春秋社
  - 池田ろさん 1990刊 般若心経 講談社
  - 木下富夫 1995刊 大乘仏教のこころ 近代文芸社
  - 弘法大師に聞くシリーズ①
  - 福田亮成 2001刊 般若心経秘鍵 ノンブル

## A discussion about "Prajnaparamita-Sutra"

Itomi OKAMOTO and Tomio KINOSHITA\*

*Department of Applied Mathematics,*

*Faculty of Science,*

*\*A part-time Reader,*

*Okayama University of Science,*

*1-1 Ridai-cho, Okayama 700-0005, Japan*

(Received July 26, 2005; accepted November 7, 2005)

There are many kinds of understanding of Hannyashingiyo. According to the basis of thoughts, such as Hooso, Sanron, Zen, the same sentence will be understood differently.

Our opinion is based on kegon including Kukai's Mikkyo. We insist that neither the world of truth nor the world where we are lost is away from truth.